

【 復活のトロパリ 第4調 】

しゆのおんなで し は ふくかつのひかるおと
主 女 弟 子 は 復 活 光 音

づれを てんしより ききうけ えて、
天 使 聞 受

げんそよりの ていざいをふる いすて、しと
原 祖 定 罪 振 棄 使 徒

にほこりてい え り、し はほろぼさ
誇 日 死 滅

れ、ハリストスカ みはふくか つして、せかいに
神 復 活 世 界

おおいなる あわれみをたま えり。
大 憐 賜

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしく どうざなるもの、ちゅう
使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリスト スのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

にみちた るうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコラ イ
照 お 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾羊群爲及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全世界爲生命賜聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき
光榮父子おと聖神歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾は初我國於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖流爾敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
屬神子爲あし、彼らにか

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第4調 】

いまもいつうもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 わがきゆうせいしゅおよびしょくざいしゅはかみと
 我 救 世 主 及 贖 罪 主 神
 して、ちにうまれしものをかせより
 地 生 者 桎 梏
 ときて、はかよりふくかつせしめ、
 釋 墓 復 活
 ぢごくのもんをやぶりて、しゅさいとして
 地 獄 門 破 主 宰
 みっかめにふくかつしたまえり。
 三 日 目 復 活 給

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 主日第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

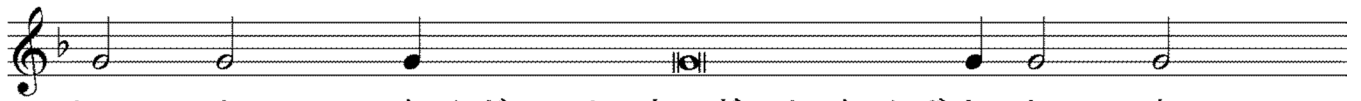
誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

し ゅ よ 、 な ん ち の し わ ざ は な ん ぞ お お き 、
 主 爾 工 業 何 大

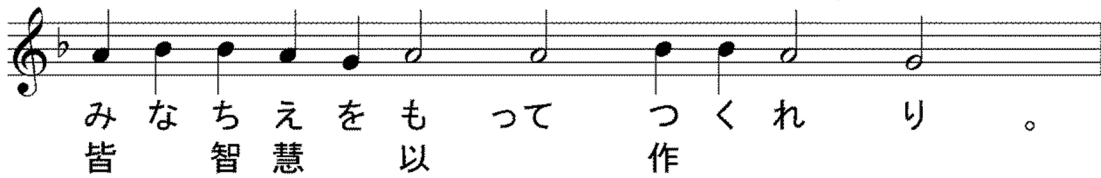


みなちえをもつてつくれり。
皆智慧以作

誦經) 我が^わ靈^{たましい}よ、主^{しゅ}を讚^ほめ揚^あげよ、主^{しゅ}我が^{かみ}神^{なんぢ}よ、爾^{いた}は至^{おおい}りて大^{おおい}なり、

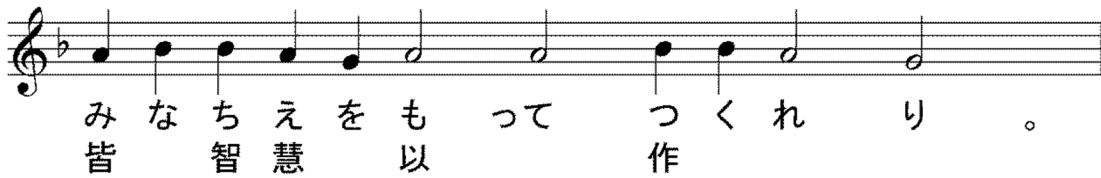


しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、
主 爾 工業 何 大



みなちえをもつてつくれり。
皆智慧以作

誦經) 主^{しゅ}よ、爾^{なんぢ}の工業^{しわざ}は何^{なん}ぞ多^{おお}き、



みなちえをもつてつくれり。
皆智慧以作

【 アポστόロス 使徒經 285 端 ティモフェイ書 4 章 9～15 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒^{せいしと}パヴエルがティモフェイに^{たつ}達^{ぜんしょ}する前^{よみ}書の讀、

司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、

誦經) 子^こティモフェイよ、此^これ^{まこと}信^まなる全^うく受^{ことば}くべき言^{けだしわれら}なり。蓋^{これ}我等^{ため}は此^{ろう}が爲^{そしり}に勞^{そしり}して謗^{そしり}
を受^うく、乃^{すなわち}活^{かみ}ける神^{のぞみ}に望^よあるに困^{かれ}りてなり、彼^{ことごと}は悉^{ひと}くの人^{こと}、特^{しんじや}に信^{きゆうしゅ}者の救^{きゆうしゅ}主^{しゅ}なり。
爾^{なんぢ}此^{これら}等の事^{こと}を戒^{いまし}め且^{かつ}教^{おし}えよ。人^{ひと}爾^{なんぢ}の年^{とし}少^{わか}きを以^{もつ}て輕^{かる}んずべからず、乃^{すなわち}爾^{なんぢ}
言^{ことば}に、行^{おこない}に、愛^{あい}に、神^{しん}に、信^{しん}仰^{こう}に、潔^{けつじよう}淨^{じよう}に於^{おい}て、信^{しん}者^{じや}の模^も範^{はん}と爲^なれ。讀^{とく}書^{しょ}と、勸^{かん}
諭^ゆと、教^{きよう}訓^{くん}とを、務^{つと}めて、我^わが來^{きた}るを俟^まて。爾^{なんぢ}に在^ある恩^{おん}賜^し、預^{よげん}言^よに由^{ちようろう}りて、長^{あん}老^{ろう}の按^{あん}
手^{しゅ}を以^{もつ}て、爾^{なんぢ}に授^{さづ}けられし者^{もの}を忽^{ゆる}かにする勿^{なか}れ。此^{これら}等の事^{こと}を思^{しねん}念^んし、專^{もつ}ら之^{これ}を務^{つと}め
よ、爾^{なんぢ}の上^{じよう}達^{たつ}が衆^{しゅう}に顯^{あらわ}れん爲^{ため}なり。

(比較用 口語訳) 子テモテよ、これは確実で、そのまま受け入れるに足る言葉である。わたしたちは、このために労し苦しんでいる。それは、すべての人の救主、特に信じる者たちの救主なる生ける神に、望みを置いてきたからである。これらの事を命じ、また教えなさい。あなたは、年が若いために人に軽

んじられてはならない。むしろ、言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい。わたしがそちらに行く時まで、聖書を朗読することと、勧めをすることと、教えることとに心を用いなさい。長老の按手を受けた時、預言によってあなたに与えられて内に持っている恵みの賜物を、軽視してはならない。すべての事にあなたの進歩があらわれるため、これらの事を実行し、それを励みなさい。

【 アリルイヤ 主日第4調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ、

ア リル イ ヤ。

誦經) ^{かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんべい せいちよく けんべい} 神よ、爾の寶座は世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、

アリル イ ヤ、

ア リル イ ヤ。

誦經) ^{なんぢ ぎ あい ふほう にく} 爾は義を愛し、不法を惡めり、

アリル イ ヤ、

ア リル イ ヤ。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思

ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ
念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ
を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ

ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし
よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至

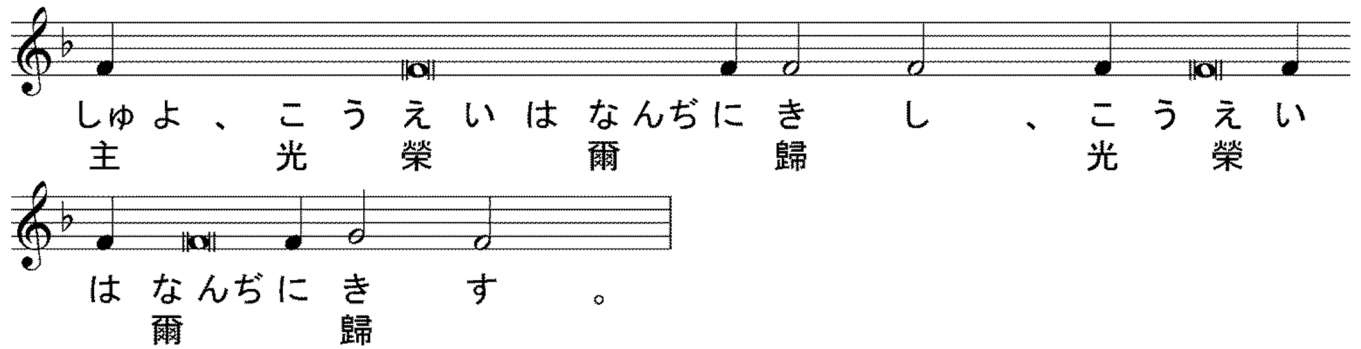
ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書91端 18章18~27節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス イェリホンに入りて過ぎ行けり。視よ、ザクヘいと名づく

る者あり、税吏の長にして富める者なり。イイスの如何なる人たるを見んと欲したれど

も、人の衆きに因りて見るを得ざりき、身の長短ければなり。乃趨り前みて、彼を見ん

ため 爲に無花果樹に升れり、彼此の旁を過ぎんとすればなり。イイス此の處に來りし時、

仰ぎて、之を見て曰えり、ザクヘイよ、速に下れ、蓋我今日爾の家に寓るべし。

彼急ぎ下り、喜びてイイスを接けたり。人皆之を見て、怨みて曰えり、彼往きて罪人

の客と爲れり。ザクヘイ立ちて、主に謂えり、主よ、我所有の半を以て、貧しき者に

施さん、若し誣いて人より收りしことあらば、四倍にして之を償わん。イイス彼に謂え

り、今日救は此の家に臨めり、此の人もアヴラアムの子なればなり。蓋人の子は亡び

もの たづ すく ため きた
し者を尋ねて救わん爲に來れり。

(比較用 口語訳) イエスはエリコにはいつて、その町をお通りになった。ところが、そこにザアカイという名の人がいた。この人は取税人のかしらで、金持であった。彼は、イエスがどんな人か見たいと思っていたが、背が低かったので、群衆にさえぎられて見るができなかった。それでイエスを見るために、前の方に走って行って、いちじく桑の木に登った。そこを通られるところだったからである。イエスは、その場所にこられたとき、上を見あげて言われた、「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」。そこでザアカイは急いでおりてきて、よろこんでイエスを迎え入れた。人々はみな、これを見てつぶやき、「彼は罪人の家にはいつて客となった」と言った。ザアカイは立って主に言った、「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれかから不正な取立てをしていましたら、それを四倍にして返します」。イエスは彼に言われた、「きょう、救がこの家に来た。この人もアブラハムの子なのだから。人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
主 光 榮 爾 歸 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ